

〔実践報告〕

当事者参加を取り入れた看護過程展開の演習の企画・実施報告

河部 房子¹ 山本 利江¹ 高橋 幸子¹
和住 淑子² 青木 好美³

The Report about Classroom of the Nursing Process with Patients' Participation

Fusako KAWABE¹, Toshie YAMAMOTO¹, Sachiko TAKAHASHI¹
Yoshiko WAZUMI², Yoshimi AOKI³

要 旨

本学1年次後期に開講される看護学原論Ⅱでは、看護過程展開の演習に患者団体による講演会を組み込む授業企画、すなわち当事者参加型授業を企画し、実施してきた。本稿では、平成17年度の授業展開と授業後の学生の反応としてレポート記述例を紹介し、学生の記述から、本授業企画の教育効果について考察を加えた。本授業企画の教育効果の第一は、講演会の中で実体験をもつ方々からの話を聴くことにより、それまで自分の描いてきた患者像とのギャップに気づかされ、自己のイメージ不足に気づく体験をしていること、第二に、目の前で実体験をもつ方々の話を聴きながら、前期に学んだ健康観、人間観、看護観の概念を想起し、目の前の現象と重ね、それぞれの概念の理解をより深めていること、第三は、患者にとって看護者のかかわりの影響の大きさを知り、当事者からの励ましを受けて感情が揺さぶられ、看護学を学ぶ意志を定めていること、であった。

Key Words：看護学原論，看護過程展開，当事者参加型授業

I. はじめに

本学1年次後期に開講される看護学原論Ⅱは、前期に開講される看護学原論Ⅰで学んだ看護実践方法論を事例に適用することを通して、看護専門職固有の判断過程について理解を深めることを目的とする専門必修科目である。学生にとっては、それまでに学んだ専門知識を活用し、初めて自己の頭脳を働かせて事例のアセスメントに取り組み、看護計画を立案するという学習体験となり、多くの学生がしばしば困難さを示す。この困難は、1年次後期の学生が、まだ形態機能学や病態学など専門基礎科目の学習途上であることによる。とはいうものの、授業を展開する側のねらいは、看護計画の正確性を目指すというより、看護の目的論

に照らして、得られた事実をどのように見つめていけば、対象の今おかれている健康状態がイメージでき、看護する手段が見えてくるのかという、看護過程を展開する思考の筋道を、しっかりとした対象理解に基づきたどるという体験をすることにある。そして、この体験を通して学生の感情が揺さぶられ、看護のイメージが実感を伴った像として描かれることを目指している。このようなねらいのもと、筆者らは、最初に学生が取り組む演習事例として喉頭腫瘍に罹患した患者を教材事例として選択し、看護過程の演習を終えた後、千葉市を活動拠点とする患者団体「千葉喉友会」の協力を得て、授業に講演会を組み込んだ。このような看護の対象となる当事者の参加を組み込んだ授業展開は、平成12年から開始し、今年で6年目を迎える。これを1つの節目として、本稿では、昨年度の授業展開の実際と授業後の学生の反応を紹介し、学生に対する教育効果を中心にこの授業企画の意味について考察する。

1 千葉大学看護学部基礎看護学教育研究分野

2 元千葉大学看護学部

3 三井記念病院

1 Chiba University, School of Nursing

2 Ex-Chiba University, School of Nursing

3 Mitsui Memorial Hospital

表1 看護学原論Ⅱ授業概要（看護学部シラバスより）

<p>1. 目的</p> <p>実際の事例で演習を繰り返し、学習した方法論を深く理解するとともに、様々な対象特性を学ぶ</p> <p>2. 目標</p> <p>① 事象を見つめる位置や目的によって見えるものが異なることを実感する</p> <p>② 事象に対する感じる心を豊かにし、考える力と表現する技を高める</p> <p>③ 看護するという目的意識に導かれて、現象から立体像を描くプロセスについて理解を深める</p> <p>④ 自己の看護観を客観視し、看護専門職への学習課題をもつ</p> <p>3. 開講時期・授業時間・単位数：1年次後期・45時間・2単位</p> <p>4. 授業内容</p> <p>① 実践方法論の修得（1～9回）</p> <p>看護学原論Ⅰで学習した看護するための思考プロセス，すなわち看護実践方法論を事例に適用することを繰り返し，修得する．学習内容は以下の事例への看護過程の展開である．</p> <p>1) 癌疾患に罹患した人 2) 脊髄損傷を負った人</p> <p>これらの事例について，事例紹介文や闘病手記・模擬看護場面をとおして，看護過程が提示される．自己学習とグループ討議をとおして，看護実践方法論を適用し，看護過程を展開する演習を行う．演習後に，実際に癌に罹患した経験者の体験談と，熟練看護師による脊髄障害を負った患者への看護のデモと講義を受ける．現実の看護過程の展開と，演習で展開した看護過程展開を比較し，学習課題を明確にする</p> <p>② 現実の看護過程と看護実践能力（10～13回）</p> <p>③ 看護学原論の学習の総括（14回，15回）</p>
--

Ⅱ. 実際の授業展開（平成17年度の場合）

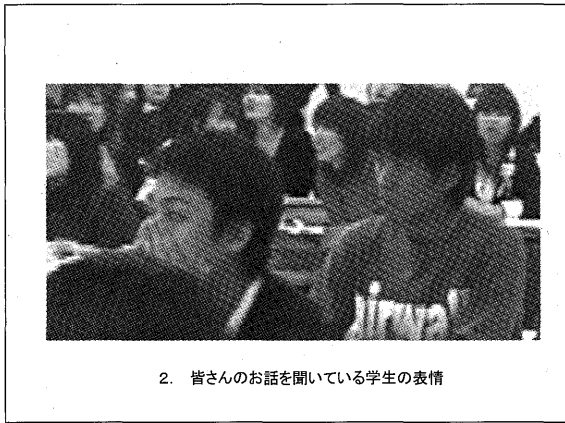
看護学原論Ⅱの概要を表1に、喉頭腫瘍事例の看護過程展開演習の概要（平成17年度）を表2に、初回授業で学生に配布する事例紹介文を表3に示す。なお、本稿における授業過程の公表に関しては、授業中の写真や講演者の個人名、学生のレポート掲載を含め、京葉喉友会、学生双方より承諾を得ている。

平成17年度は、計5回10時間の授業時間を使って看護過程展開の演習を終えた後、6回目に京葉喉友会の方々による講演会を企画した。この回の学習目標は、1) 障害を持ちながら生活している方々の実体験を観念的に追体験し、「健康とは人間がもてる力を発揮して生きること（健康の本質）」という観点から、その意味を考える、2) 日常生活のこまごまとしたことの中に、人間のもてる力とそれを阻害するものを発見する、であった。まず神崎会長から、京葉喉友会の概略について説明がなされ（写真1）、その後、工藤部長が食道発声の仕組みと、発声を獲得することがどれだけ大変な努力を要することかについて語ってくださった（写真3）。また、命と引き替えに声を失うことの苦悩を、ご自身やこれまで多くの患者と関わってこられた経験から語ってくださった。そして、安永副部長からは、30年以上に及ぶ喉摘者としての生活経験から、食道発声をマスターして仕事を定年まで勤め上げられた体験や、永久気

管孔があっても特殊な機械を使って水泳を楽しんできたことなどが語られた（写真4）。佐藤指導員からは、癌の告知を受けたときの衝撃と現在も再発の不安を常に抱えていること、手術を受けた後も捨てられなかった発声へのかすかな期待と、それが打ち砕かれた時のショック、入院中に看護師や看護学生から受けた看護の体験などが語られた（写真5）。白井指導員からは、術後の身体的な苦痛の大きさ、食道再建術であったために食道発声をマスターするまでの年単位の努力を要したことなどが語られた（写真6）。最後に出永指導員からは、電気喉頭による発声の仕組みや機種による声の違いなどが語られ、実際に学生に電気発声器による発声をやらせてくださった（写真7）。すべてのお話が終わり学生からの質問を尋ねたと



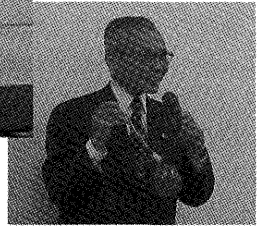
1. 京葉喉友会に関する説明及び進行役を引き受けてくださった神崎会長



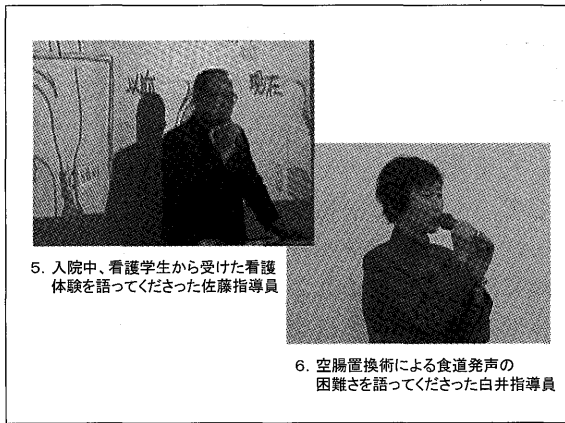
2. 皆さんのお話を聞いている学生の表情



3. 図版を元に食道発声の仕組みについて説明して下さった工藤指導部長



4. 風船笛を例に発声の仕組みを説明して下さった安永指導副部長



5. 入院中、看護学生から受けた看護体験を語って下さった佐藤指導員



6. 空腸置換術による食道発声の困難さを語って下さった白井指導員



7. 電気発声器を用いた発声訓練について説明して下さった出永指導員と、実際に電気発声器を試している学生たち

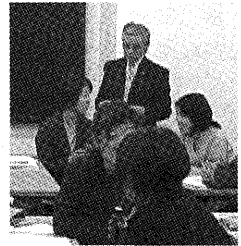


表2 喉頭腫瘍事例の看護過程展開演習の概要 (平成17年度)

	学習内容	授業内容
第1回	・看護の情報とは	<ul style="list-style-type: none"> ・看護の方法論を意識しながら教材事例 (Aさん) の事例紹介文 (表3) を読み、注目すべき事実とその意味を考える。意味のわからない専門用語などについては、各自調べてくる。 ・Aさんの全体像 (実体面・認識面・社会関係の事実を時の流れにおいて見つめた像) を自身の頭の中に作り上げるつもりで、Aさんの事実を全体像モデルに記入する
第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活力とは ・対象特性とは ・生物体の必要条件とは 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自描いてきたAさんの全体像をグループ内でつき合わせる ・Aさんの入院生活の様子を具体的に想像し、日常生活力アセスメントモデルの12項目にそって、Aさんの日常生活の自立度をアセスメントする ・Aさんの健康状態の特殊性 (対象特性) を、発達段階・健康障害の種類・健康の段階・生活過程の特徴の4側面から明らかにし、Aさんがよりよい健康状態に向かうためにはどのような条件を満たす生活が必要か (生物体の必要条件) を考える
第3回		
第4回	<ul style="list-style-type: none"> ・生命力とは ・看護計画とは 	<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんの生物体の必要条件に生活体の反応をかさね、Aさんに解決を要する対立が発生していないかを考え、看護上の問題を明確にする ・Aさんがよりよい健康状態に向かって生活することを支援するために、自分たちがAさんに対して行いたい看護を話し合い、グループでAさんの看護計画を立案する
第5回	・看護の評価とは	<ul style="list-style-type: none"> ・「Aさんを実際に受け持ったある看護学生のかかわり」を通して、行った看護を評価するとはどうすることなのかを理解する
第6回	・もてる力を働かせて生きるとは	<ul style="list-style-type: none"> ・喉頭摘出術を受け、その障害と共に生活されている方々の実体験を聞く

表3 初回授業で学生に示す事例紹介文

年齢：62歳 性別：男性 身長：170cm 体重：80kg 診断名：喉頭腫瘍，右頸部リンパ節転移 職業：会社役員

今年の4月頃より咽頭痛があり，病院を受診した。生検の結果，喉頭腫瘍と診断され，手術目的で9月12日に入院し，9月15日に喉頭部分切除術，気管切開術を受けた。術後に手術中採取した組織の病理学的検査の結果，右頸部リンパ節に転移が見つかり，22日，喉頭全摘術，永久気管孔造設術，右頸部リンパ節郭清術を受けた。

10月5日現在，胃管挿入中で，食事は経管栄養食1,800kcalである。唾液を飲み込まないために，常時バイトブロックを口にくわえている。気管孔からの痰の吸引は自分でできる。今朝6時の検温では，脈拍数72回/分，血圧110/60mmHg，呼吸数16回/分，体温36.7℃であった。呼吸音は清明で雑音は聴取されなかった。昨日の排便は1回（軟便）排尿回数は7回とのこと。昨日の1日尿量は1,400mlであった。近日中に食道透視検査が予定されている。

ホワイトボードに「早く嚥下を上達し，お寿司を食べたい。」「株主総会までに発声をマスターしたい」と書く。妻（50歳），2人の息子（27歳，25歳）の4人暮らし。趣味はゴルフ，カラオケ。妻は毎日面会に来る。耳鼻咽喉科病棟の4人部屋に入院中である。

ころ，普段の入浴や衣服の工夫など，永久気管孔を造設したことによる日常生活上の様子についての質問があった。

Ⅲ. 授業終了後の学生の反応

6回目の授業後に学生から提出されたレポートの抜粋を表4に示す。レポートのテーマは，“「今時の目標」を意識しながら，喉頭摘出術を受けその障害と共に生活されている方の実体験を聞き，感じたこと考えたことを原稿用紙1枚に記述する”であった。

Ⅳ. 考 察

ここでは，提出された学生のレポートにみる，本授業企画の教育効果について考察する。

まず，多くの学生が，6名の方々からの話を通して，5回目までの授業の中で描いてきたイメージの不足を実感していた。その内容の第一は，癌の再発への不安を常に抱えて日々過ごしていらっしゃることや，声を失うということが人をどれだけ絶望的な気持ちにさせるのかといった，喉頭腫瘍に罹患したことにより生じるさまざまな心の様子についてのイメージ不足であり，第二は食道発声そのものや発声の習得の困難さといった，食道発声に対するイメージ不足であった。このイメージ不足に気づく体験は，自分がそれまでの授業の中で対象者である事例のことをわかったつもりになっていたことに気づく体験でもある。この学習段階にある学生にとってイメージ不足が生じるのは自明であるが，まずそのイメージ不足に気づくこと，そしてわかったつもりになっていた自分に気づくことが重要だと考える。なぜなら，このギャップに気づくことが，事実から患者像を描い

ていく思考の進め方を，より現実的なものへと修正していく出発となるからである。レポートからは，ほとんどの学生が，京葉喉友会の方々の話を実際に聞くことによりこの出発を体験していると読み取れ，これは本授業企画の教育効果のひとつであると考えられた。しかし，そこから自己の判断過程への問い返しが起こっているかはレポートからは読み取れなかった。したがって，この体験を通して，自分はこのような状態にある方の心の様子を本当にその人の位置から考えようとしていたか，食道発声というものを現実的にイメージしようとしていたか，という，自分の事例へ向かっていた時の思考のあり方を，学生自身が自問自答するよう補う必要があると考える。

近年，看護の対象者をより現実的にイメージしながら看護の学習をすすめるための授業企画として，模擬患者や当事者参加を取り入れた授業実践が多くの大学で実施され，その教育効果が報告されている¹⁾²⁾。これら授業実践の報告からは，臨床経験の少ない学生にとってイメージしにくい看護の対象者の状況を，よりリアルにイメージすることを助けるという教育効果が確認された。これは，前述の本授業企画の教育効果と重なるものである。しかし，自己の対象像の描き方への不足を実感する体験は，看護過程展開の演習を終えた後に当事者の話を聞くという，本授業企画特有の効果であると考えられた。当事者参加の企画を授業過程のどの段階に組み込むかによって，その教育効果は異なる。例えば前出の報告ではアセスメントの段階に組み込み，学生の適切なアセスメントを促進する効果をねらっていた。しかし，看護学の学習の初期段階にある学生にとって，実際に闘病体験をした当事者からの語りや印象の強いものである

表4 講演会後に提出された学生のレポート (抜粋)

<p>失声の辛さを私は甘く考えていた。声を失うことを拒むために手術前夜に逃げ出す人、手術を拒否し自ら死を選ぶ人もいるという現実。そして声が出ないことは死んだも同じという実体験者の言葉から、私は声を失うことの重大さを強い衝撃とともに感じた。食道発声法修得までの道のりも、入院生活により体力のおちた方にとって辛く厳しいものである。</p>
<p>喉頭摘出術を体験した方々の話を聞き、私は今までの授業で間違っていたイメージを抱いていたことがわかった。私は、再発の不安はあると思っていたがそれ以上に見た目の変化、発声方法の変化により、社会生活の不安の方が大きいのではないかと考えていた。どこかで大きいのではないかと考えていた。どこかで健常者に引け目を感じ活発に行動することを控えているのではないか。しかし、話を聞くと旅行にも行くし、友達と電話もするという事だった。見た目もネクタイを締め外見からは障害を全く感じられなかった。これはとても驚きであり勉強になった。</p>
<p>私は今回実際に咽頭摘出術を行い障害と共に生活している方々の話を聞き、大変驚きました。まず、外見上は健常者と何ら変わらないということです。気管孔を造設したため洋服などにも何かしら制限を受けるだろうと考えていましたが、皆さんの格好を見た限りでは、制限などあまり受けていないようでした。次に、電話やカラオケ、水泳などといった趣味に関しても、訓練すればカラオケや電話はできるし、器具を使えば水泳などをすることも可能であるとおっしゃっていました。私は日常生活では不自由なく生活できる程度まで回復することはできても、趣味などに関しては制限されてしまうのは仕方ないことと考えていましたが、ここまで回復するという事に驚きました。</p>
<p>今回、私が最も印象に残ったのは、長い間苦勞をしてやっと食道発声ができるようになり、今度は自分の今までの体験を伝えていきたいと話されたことです。喉頭摘出術を受けた方は声を失い大きなショックを受けたけれど、そこから希望を持って努力できたのは、たとえ喉頭を失っても訓練をすれば発声できるようになる、また会話ができるようになると知り、実際にそれを達成された方々を見たからだと思います。自分が勇気や希望をもらったように、今度は自分達が希望を与えよう、技術を伝えていこうと頑張ることは、今自分にできること、自分の持っている力を十分に発揮して生きることにつながっていると思いました。</p>
<p>京葉喉友会の方々は、前向きに生きている。闘病生活を生きる力に変えているとさえ感じた。今まで支えてくれた人々に感謝しながら、再発の恐怖と闘いながら、生きる力である声を多くの人が取り戻せるように活動している。生命力を発揮させて生きるという意味が明確な形で理解できた気がする。</p>
<p>京葉喉友会の方々のお話を聞き、健康という言葉の意味について、改めて考えることができた。京葉喉友会の方々は、喉頭摘出後の音声言語機能喪失の障害者として認定されてはいるが、食道発声や電気発声によって音声言語機能を再獲得し、まさしくもてる力を発揮して生きているのだと感じた。けれど、食道発声は習得が難しく高齢者には体力的にも困難であったり、他の発声法は器具が必要だったりして、もてる力を十分に発揮できない方もたくさんいることに、やりきれない思いがした。一度は声を失ったものの、今では雑談やカラオケを楽しんでいると話す京葉喉友会の方々の表情はとて明るく輝いて見えた。生きることは本当に素晴らしいことだと強く感じた。</p>
<p>別の先生がいったことだが、「喉頭摘出と宣告されて希望を失っている人がいたら、どうぞ私達のことを聞かせてあげてください。“声帯がなくても声を出せる人はたくさんいるのよ”って。人間をだめにするか、夢を持たせるかそれはあなたたち次第ですよ」という言葉がとてとても印象的だった。看護師は患者さんにとってそれほど絶大な影響力を与える存在にもなるのかと思った。今回の体験を忘れずそして卒業までにもっと沢山のことを経験して、知識を身につけて、将来患者さんに希望を持ってもらえることができるような看護師になりたいと思った。</p>

ことは想像に難しくなく、その語りを看護者が専門家として描くべき対象像と混同して捉える危険性につながると考える。看護過程展開の学習は専門的な判断過程の学習であると考え、まずは未熟であっても、自己の思考を働かせて看護過程を展開するという過程を辿ることが重要であり、これが、本授業において自己の対象像の描き方への

不足の実感という効果をもたらしたと考えられた。

また、このようなイメージ不足は、看護計画立案の時点で思い描いていた患者の未来像にも表われていた。学生たちは、京葉喉友会の方々の日常生活の様子や、障害を持ちながらも旅行やカラオケ、水泳などの趣味をこれまでと同じように続けている様子を聞き、自分たちが描いていた未来像

とのギャップを実感していた。一方で、そのような姿を人間のもてる力の発揮された健康な状態と捉えていた。また、人間のもてる力の大きさを実感している記述も多く見られた。学生は、1年次前期に開講される看護学原論Ⅰの中で、健康とは人間のもてる力が最大限に発揮された状態であり、看護は1人1人がそのような状態で生きることを支援することであると学ぶ。このような健康観、看護観を学ぶときにも、抽象的な概念を具体を通して理解することができるよう、具体的な教材事例を用いるなどの工夫をしているが、やはりここにも観念的な理解という限界がある。京葉喉友会の方々からの話を通して学生は、前期に学んだ健康観を呼び起こして目の前でお話されている姿と重ね、健康の本質を、実感を伴った像として描いていると考えられ、このような健康観や人間観の深まりも、本授業企画の教育効果であると考えられる。

さらに、レポートからは多くの学生が、京葉喉友会の方々のお話を聞いて、患者にとっての看護職の役割の大きさを実感していた。講演会の中で、京葉喉友会の方々からは、入院時に看護者からかけられた言葉に元気付けられたという様々な体験を具体的に話して下さり、また学生に対して多くの励ましの言葉をかけてくださった。そのような具体的な体験を聞くことを通して、看護師のかかわりが患者の心の状態に大きく影響するという現実を知り、また患者であった立場の方から直接に激励の言葉をかけられることにより、学生の感情が大きく揺さぶられ、看護学を学ぶ意欲、動機づけへとつながっていくと考えられた。入学時の学生

の看護学への志向性は多様であると推察されるが、いかなる志向性であっても看護学を学ぶからには、看護の対象者からの視点をその中核に据えなければならぬ。この時期の学生は、対象者からの視点が中核になるということを知り始めた段階の学生であるが、このような、学生の感情を揺さぶる体験は、対象者からの視点で看護を考えるという基盤となり、そのような観点とのつながりにおいて看護学を学ぶ強い動機づけへと連動していくと考えられた。

V. おわりに

本稿では、平成12年度から企画・実施してきた、喉頭腫瘍に罹患した方の事例を用いた看護過程展開の一連の授業企画と実施の概要、学生の反応について紹介し、教育効果について考察を加えた。今後は、学生にとっての教育効果を、より研究的に明らかにする段階へと歩を進めていきたい。最後に、毎年学生に多くの気づきと感情を揺さぶる体験を提供して下さる、神崎和会長をはじめとする京葉喉友会の方々には深謝したい。

引用文献

- 1) 森川三郎ほか：看護基礎教育における当事者参加の授業 全学的に取り組んで、看護教育、47(6)、466-470、2006。
- 2) 村田日出子：老年看護学におけるリアリティある看護過程演習の検討—模擬患者とロールプレイを導入して—、日本看護学会集録（看護教育）、82-84、2003。